

# 利子生み資本と資本の物神性(上)

——宇野弘藏氏の所説によせて——

寺 田 稔

は し が き

## 一 貸付資本と資本の物神性

### (1) 利子の根拠

(イ) マルクスの見解に対する宇野弘藏氏の批判

(ロ) 宇野弘藏氏の見解

### (2) 物神性についての宇野弘藏氏の見解(以上、本号所載)

## 二 擬制資本と資本の物神性

(1) 資本の商品化と「資本市場」における利子率

(2) 資本の物神性の完成についての宇野弘藏氏の見解

(3) 「貨幣市場」における利子率と「資本市場」における利子率についての若干の補足

## 三 「貨幣市場」と「資本市場」

(1) 資本という商品の二面性

利子生み資本と資本の物神性(上)

## 利子生み資本と資本の物神性（上）

六四

(2) 利子と利子率の混同  
むすび

は し が き

マルクスの『資本論』では利子生み資本論が、まず「貨幣——というのは、ここでは、ある価値額の自立的表現を意味し、事実上その価値額が貨幣として実存するか商品として実存するかをとわない——は、資本制的生産の基礎上では資本に転化されうるのであって、この転化により、ある与えられた価値から、みずからを増殖し増加する価値となる。……かようにして貨幣は、貨幣として有する使用価値のほかに、一つの追加的使用価値、すなわち、資本として機能するという使用価値を受けとる<sup>(1)</sup>」ということを前提にして、貨幣がかかる追加的使用価値をもつものとして商品となるということを出発点として展開されている。そして、その商品を純粋なたちで分析するために、一方には、その商品の売手である貨幣資本家を、他方には、その商品の買手であり、その商品の使用価値を実現させる機能資本家を想定したのである。

(1) K・マルクス『資本論』インスティトゥート版、第三部三七〇—一頁。以下『資本論』からの引用は、『資本論』Ⅲ三七〇—一というように表示する。なお、訳文は原則として長谷部文雄訳、青木文庫版によるが、宇野弘藏氏の著書および論文に引用されている訳文によったところもある。また、氏の著書および論文の中にある『資本論』からの引用頁数の表示は右のようであらためて表示することにする。

ところが、マルクスのかかる方法に対して宇野弘藏氏は、「理論的には利潤のえられる資本の投資をさけて、その

一部分たる利子をうるにすぎないような資本の貸付を選ぶ『貨幣資本家』なるものを想定することはできない。利潤論にしても、地代論にしても、あらゆる資本家はすべてその資本としての貨幣を生産過程に投じて一定の利潤をあげるものとして展開されている。そこにはここでいう『貨幣資本家』のような資本家の発生の余地はない。さらにまたこの『貨幣資本家』に対応して想定される。マルクスのいわゆる『機能資本家』の如き資本をもたない資本家は理論的には到底許されないことである」(宇野弘蔵『経済学方法論』昭和三十七年 東大出版会刊 二六七頁)と批判されている。

しかし、問題はむしろ氏が何故このようなことをあらためて問題にされねばならないかということにある。現実には、貨幣の貸手は銀行または銀行への預金者であるにせよ、また貨幣の借手である機能資本家——産業資本家または商業資本家——は自己資本をもっている資本家であるにせよ、ともかくそこに貨幣の貸付・返済という関係が存在し、またその貸付に対して利子が支払われるという関係が存在しているのである。そして、利子生み資本論にあつては、そのことは既に前提になっているのである。このような関係が資本主義社会には存在しないといわれるならばともかく、現実存在する以上、その現実を与えられたものとして前提した上で、その貸付けられる貨幣を分析すればよいのであって、『資本論』では、その貨幣を純粹なたちで分析するために、一方にはその貨幣の貸手として貨幣資本家を、他方にはその貨幣の借手として自己資本をもたない機能資本家が想定されているのである。そしてそのことは、単に頭の中で考えられたということではなく、その商品が取引される市場では、商品の売手つまり貸手は、たとえ市場外では産業資本家または商業資本家であろうとも、貨幣資本家としての資格であらわれるのであり、また商品の買手つまり借手は、たとえ自己資本をもった機能資本家であろうとも、その取引される商品に資本に関してい

ば、資本をもたない機能資本家としての資格であらわれるということに基いている。また、その現実を見ただけでは高利資本との区別がつかないといわれるならば、貨幣が「資本として機能する」（『資本論』Ⅲ三七一）「平均利潤を生み出す能力」（同上、三八五）という追加的使用価値をもつということが『資本論』の第三部第四篇までの理論展開によって既に明らかにされているのであり、かかる追加的使用価値をもつものとして貸付けられる貨幣が分析の対象として取上げられているということを指摘せねばならない。つまり、現実の社会の一部に高利資本が存在しているとしても、何ら問題にするにはあたらないのであって、それは利子生み資本論での分析の対象としては取り上げられないのである。

ところが、宇野氏はマルクスのいう貨幣資本家と機能資本家とを右に述べたような意味に解釈したとしても、なお問題が残るかに次のようにいわれる。

「問題点は、資本家がその資本の運用に対して追加的に資金を借入れる関係から、その貸借関係だけを抽象して考察するという方法にある。何かそういう方法こそ、事態を純粹の状態で考察するものであるかのように考えられ易いのであるが、決してそうではない。貸付ける側が『貨幣資本家』に、借入れる側が『機能資本家』に抽象されるもののためだが、しかしそれと同時に貸借される貨幣の性格も全くその基盤を離れたものになる。その出所不明の貨幣が、ただ貸付けられた『機能資本家』の手で資本主義的に利用されるということから、その利子を剰余価値の一部分とせられるにすぎない。利子は剰余価値の形成と内的関連をもって明らかにされるというものではなくなるのである」（前掲『経済学方法論』二六八頁。）

ここには、マルクスの利子生み資本論に対する氏の理解の仕方が最もよくあらわれている。マルクスは貨幣が資本

として機能するという使用価値をもつものとして商品となるということを出発点として利子生み資本論を展開しているのであり、その商品を純粹なかたちで分析するために、その商品の売手と買手の最も簡単な関係として、売手としては貨幣資本家を、買手としてはその商品の使用価値を実現させる機能資本家を想定したのであるが宇野氏はそのことを全く逆に理解されている。すなわち、マルクスが独自の種類の商品、資本という商品を分析するために貨幣資本家と機能資本家を想定したのを、逆に、貨幣資本家と機能資本家の関係を出発点にして利子生み資本論を展開したものと理解され、「資本家が……資金を借入れる関係」からその「資金」をとりだして考察したのではなく、「貸借関係だけを抽象して考察」したと解されるわけである。したがって、マルクスにあっては「資本として機能するという使用価値」（『資本論』Ⅲ三七二）をもつ貨幣と述べられているものも、氏にあっては「出所不明の貨幣」と理解され、またその商品の価格である利子も、マルクスは、その商品の使用価値である「資本に転化した貨幣が生産する利潤」（同上 三七二）、「平均利潤を生みだす能力」（同上 三八五）との関連において、まさに「剰余価値との内的関連」において、その利潤の一部分、平均利潤の一部分と規定しているにもかかわらず、宇野氏はそれを「剰余価値との内的関連をもって明らかにされるといふものではなくなる」と理解されるわけである。

そして『資本論』第三部第五篇に対する氏の批判は、すべて以上のような理解を前提にせなされているのであり、こうした理解とそれに基づく批判とは、マルクスの利子生み資本論および信用論に対する批判の最も基本的な立場を示すものといつてよいであろう。また、たとえば「『資本論』の利子論は、原理論的純化が……機械的に行われた最も顕著な一例を示すものとなっている」（前掲『経済学方法論』三〇四頁）といわれているように、この第三部第五篇は『資本論』の中でも特に大きな欠陥をもつものとして氏の『資本論』批判の中でも重点的に取り上げられ、これ

までに種々の批判がなされて来た。そして近年では、「マルクスは『資本関係の外化』を『利子生み資本の形態』をもつて説明しようとして成功しなかった」ということは確定してよいのではない、かと思う」（宇野弘蔵「資本の物神性について」『唯物史観』第四号、昭和四十二年 河出書房新社刊 二四頁）といわれ、またマルクスの立場から宇野氏を批判された長幸男氏<sup>(2)</sup>に対しても、「物神性というものに対する考え方が問題じゃないかと思う」（宇野弘蔵編『資本論研究』Ⅴ 昭和四十三年 筑摩書房刊 三三三頁）と反批判されているように、資本関係の外化、資本の物神性という観点からマルクスの利子生み資本論批判を精力的に行われている。そこで本稿では、資本関係の外化、資本の物神性というものを中心にして、氏の利子論およびマルクスの利子生み資本論に対する氏の批判を検討して行きたいと思う。

（2） 長幸男「利子論にかんする研究—宇野『利子論』展開の仕方」（『資本論講座』第五分冊、昭和三十九年青木書店刊 所収）

## 一 貸付資本と資本の物神性

### （1） 利子の根拠

#### （イ） マルクスの見解に対する宇野弘蔵氏の批判

利子生み資本論における最も基礎的な問題の一つである利子の根拠について、宇野氏は、「マルクスでは貸付資本家がマルクスのいわゆる機能資本家に資本を貸付けけるものとして説かれている。したがって先ず第一には、貸付資本に対して支払われる利子は、機能資本家の手で得られた利潤の一部分とせられながら、その一部分が利子として分割さ〔れ？—引用者〕るという根拠は、個人的には兎も角、社会的には全然ない」（前掲「資本の物神性について」一八頁）

とマルクスを批判されている。そこで、まずこの点から検討をはじめたいと思う。

既に述べたことであるが、マルクスは貸付資本、利子生み資本を、まず、貨幣が資本として機能するという使用価値をもつものとして商品となるということから説いているのであり、その商品を純粋なたちで分析するために、その商品の売手として貨幣資本家を、その買手としてその商品の使用価値を実現する機能資本家を想定したのである。そして、資本として機能するという使用価値をもつ商品、つまり資本という商品が販売される独自の方式が貸付なのであるから、かかる意味において、「マルクスでは貸付資本は、貨幣資本家がマルクスのいわゆる機能資本家に資本を貸付けるものとして説かれている」といわれるかぎりでは問題はないのであって、そこからは氏がいわれるような批判が出て来る余地はない。すなはち、利子は、『資本論』では、たとえば、「利潤のうち……産業資本家か貨幣資本家に支払われるべき一部分にすぎぬ」（『資本論』Ⅲ三九一）と述べられているが、そうした規定も貨幣資本家と機能資本家との個人的な関係から導きだされたものではなく、貨幣が資本として機能するという使用価値をもつ商品として取引されるということから導きだされているのである。つまり、貨幣は資本として機能するという使用価値をもつ商品として取引されるのであるから、その貨幣が資本に転化されて生み出す利潤よりも利子の方が一般的にみて大きいならば、買手にとっては、それはかかる使用価値をもつ商品として買ったものとはいえないし、また利子がゼロであれば、売手にとっては、それを商品として売ったことにはならないということから、そうした規定が導き出されているのである。そして貨幣がかかる使用価値をもつということは、資本制的生産関係という社会的関係のもとで生ずるのであるから、マルクスにあっては利子は社会的な根拠をもつものとして明らかにされているということが出来る。

ところが、宇野氏は、「マルクスでは貸付資本は、貨幣資本家がマルクスのいわゆる機能資本家に資本を貸付けるものとして説かれている」といわれても、それは右に述べたような意味でいわれているのではない。貨幣資本家は自己の所有する貨幣を直接に再生産過程に投下するかわりに、貨幣資本家の個人的事情から、たまたまそのことを機能資本家に委託し、そして機能資本家はその貨幣を現実に資本として機能させて得たところの利潤の一部分を個々の契約に基いて貨幣資本家に支払うというような、貨幣資本家と機能資本家との個人的な関係からマルクスが貸付資本およびその利子を説いているものと理解され、かかる理解のもとにいわれているのである。

したがって問題は、貨幣が資本として機能するという使用価値をもつ商品として取引されるということ、つまり資本という商品が取引されるということの理解の仕方にある。氏は、マルクスが貨幣資本家と機能資本家の個人的関係から貸付資本を説いているという理解に基いて、そのことも、借手が借入れた貨幣を現実に資本として機能させることだと理解されているのである。こうした理解の仕方は、さきに引用した「〔マルクスでは——引用者〕貨幣が、ただ貸付けられた『機能資本家』の手で資本主義的に利用されるということから、その利子を剰余価値の一部分とせられるにすぎない」という文章においてもみられるが、次の引用文をみることによってそれは一層明らかにになる。

「マルクスは、『資本という商品は、その使用価値の消費によってその価値及びその使用価値が保存されるのみでなく、更に増殖される、という特性をもっている』（『資本論』Ⅲ三八四―五）といって『労働力と或る種の類似性をもっている』（同上 三八五）ようにいうのであるが、ここで『資本という商品』とせられるものは、実は『資本としての貨幣の使用価値』にすぎない。それは労働力や生産手段の購入に充てられて、資本となるが、それ自体では『その消費によってその価値及びその使用価値が保持される』とか、『増殖される』とか、とはいえない。『資本として』



も『貨幣の使用価値』は、そういう生産手段に転化されるということにあり、『その使用価値の消費』は、かかる転化に充てられることにほかならない。……ここでも『資本』として使用せられうる貨幣が直ちに『資本という商品』にせられているのである。そしてその使用価値が『平均利潤を産む能力』（同上 三八五）とせられるのであるから、利潤の一部分をなすにすぎない利子をその代価とするわけにはゆかなくなる。貸手と借手の関係は、商品の売買関係ではないのである」（前掲『経済学方法論』二七三—四頁）。「商品として当然のことであるが……買手として借手の手において如何様として特定の商品の買入に充てられるか、あるいは単なる支払いで充てられるかによってその使用価値を決定されるものではない」（同上 二七五頁）。

みられるように、ここでは、資本としての貨幣の使用価値は生産手段や労働力に転化されることにあると考えられ、貨幣が資本として取引されるということ、つまり資本という商品が取引されるということは、借手がその借入れた貨幣を生産手段や労働力の購入に充てることだと理解されているのである。

しかし、生産手段や労働力は商品として市場に存在しているのであるから、貨幣が生産手段や労働力に転化されるということは単なる貨幣の使用価値にすぎないのであって、それ以上のものではない。つまり、資本としての貨幣の使用価値ではない。資本としての貨幣の使用価値は、貨幣が資本として機能し利潤を生むということ、「資本家をして、一定分量の不払労働、剰余生産物および剰余価値を労働者から引出して取得することを得せしめる」（『資本論』Ⅲ三七〇—一）ということにあるのである。<sup>(3)</sup>そして、資本制的生産の基礎上では、貨幣は貸付けられる以前から、貸付けられると否にかかわらず、かかる属性をもつのであり、それだからこそ、貨幣はかかる属性をもつものとして売られ得るものに、商品に、なるのである。本稿の最初に「貨幣……は、資本制的生産の基礎上では……貨幣として

有する使用価値のほかに、一つの追加的使用価値、すなわち、資本として機能するという使用価値を受けとる」（同上、Ⅲ三七〇—一）ということが利子生み資本論の展開のための前提であると述べたが、そのことはまた、貨幣が現実に商品として取引されるための前提でもある。そして、貨幣は貸手と借手の間では——商品として取引されるということからいって当然のことであるが——取引されるはじめからかかる使用価値をもつものとして、つまり資本として取引されるものである。

（３）資本としての貨幣の使用価値は、資本として機能し、利潤を生むということにあるので、「資本という商品は、その消費によって」つまり資本として機能することによって「その価値及び使用価値が保存されるのみでなく、更に増殖される」のである。また、かかる使用価値が売られるのであるからこそ、その商品は一定期間を限って売られる（それ以外にはその使用価値は売られない）のであり、貸付という形式をとるのである。

したがって、貨幣が資本として機能するという使用価値をもつ商品として取引されるということ、つまり資本が商品として取引されるということは、借手が借入れた貨幣を現実に資本として機能させるかどうか、生産手段や労働力の購入に充てるかどうかということや、借入れた金額だけで一つの独立した資本として機能させるか、それとも自己資本と合わせて資本として機能させるかというようなことは関係がないのである。なおいい添えるならば、資本が商品として取引されるということ、取引されるものが資本だということは、それが貸手に利子をもたらすということからいわれているのではない。貨幣は資本としての使用価値をもつという規定性において、つまり資本としての規定性において取引されるのであるから、取引される対象そのものが資本としての貨幣なのであり、資本なのである。

このようにみて来るならば、宇野氏が、貨幣は資本として機能するという使用価値をもつ商品として取引される

ということ、借手が借入れた貨幣を現実に資本として機能させること、あるいは生産手段や労働力の購入に充てることだと理解され、そうした理解に基いて、「マルクスでは……貸付資本に対して支払われる利子は機能資本家の手で得られた利潤の一部分とせられながら、その一部が利子として分割さ〔れ〕る」という根拠は、個人的には兎も角、社会的には全然ない」といわれることが誤りであることはや明らかであろう。そして、こうした批判をされるということは、氏が、貸手と借手の間で取引される貨幣は資本としての貨幣であり、資本であるということを理解されず、貸付資本にあっては、資本が貨幣として、物としてあらわれるという資本関係の物化、資本物神を理解されていないことを示している。

では、資本関係の物化、資本物神を理解されず、マルクスをこのように批判された氏自身は、いかなる根拠によって貸付資本を利子を説いておられるのであろうか。次にそのことをみて行きたい。

#### (四) 宇野弘蔵氏の見解

##### 一

利子の根拠については、宇野氏は次のように述べておられる。

「利子は、個々の資本の運動に伴って生ずる遊休貨幣資本を資金として一時他の資本に融通し、剰余価値の生産を社会的に増進して、その一部分をその代価として受けるものである。それは資本の再生産過程において資本が商品、貨幣の形態に留まる期間としての流通費用の節約に基くものである」(宇野弘蔵 新版『経済原論』昭和三十九年 岩波書店 刊 二三八頁)。「産業資本は……その流通過程に附随する、自らは不経済とする流通費用をこの資本形式(利子付資

本G…G'の形式——引用者」をもって、いわば資本家社会的に節約することになるのであって、この形式にもその価値増殖の合理的根拠を与えることになる」（同一九七頁）。「利子論では……流通費用の節約による利潤率の上昇を追求しつつ、なお残存する利潤率の不均等を均等化するものとして、はじめて利子の存在根拠が明らかにされるのである」（宇野弘蔵「利子率について」『マルクス経済学原論の研究』昭和三十四年 岩波書店刊 所収 二五四頁）。

（4）この引用文からわかるように、氏が利子の根拠として流通費用の節約といわれる場合、その流通費用とは流通資本のことをさしているのである。それは、「資本の流通過程は、生産過程にある生産資本を費用化すると共に、生産期間をも流通期間と共に費用化することになる」（前掲 新版『経済原論』八八頁）。「流通過程においても商品の売買は一般に労働と資材とを必要とするのであって、単に流通過程に資本としてあるといういわば消極的な費用だけでなく、それと共に積極的な流通費用をも必要とする。一般に流通費用というときは両者を含めていうのである」（宇野弘蔵 旧版『経済原論』上巻 昭和二十五年 岩波書店刊 一四九頁）という考えに基いているのであろう。しかし、このような流通費用概念の把握の仕方、つまり、「単に流通過程に資本としてある」ということだけでそれを費用——流通費用——とする考え方には同意しがたい。ただ、この点について立入って論ずることは本稿の課題から離れるので、一応、氏がいわれる意味での流通費用をさす場合にはカッコをつけて使用して行くことにする。

これらの引用文から、氏が利子の根拠といわれるのは、「流通費用」の節約、またはそれに加えて利潤率の均等化のことをさしていることがわかる。そして「遊休貨幣資本を資金として一時他の資本に融通し剰余価値の生産を社会的に増進」するというのも、結局は「流通費用」の節約に基くものとされているのである。しかし何故、氏はこのように「流通費用」の節約、または、それと利潤率の均等化とをもって利子の根拠とされるのであろうか。「流通費用」の節約については、氏はさらに「〔マルクスの——引用者〕利子論は、その出発点においては資本の再生産過程

における流通費用の節約という、資本主義体制における利子の極めて重要な機能を採用し上げえないことになっている。貸付資本は、資本の再生産過程の外にいる貨幣資本家の資本ということになるのであって、利子形成の客観的根拠は全くないといってよい」（前掲「資本の物神性について」二〇頁）ともいわれているので、まずこの点から見て行くことにする。

いま、さしあたり、マルクスに対する批判の可否は別にして、氏が「利子論はその出発点において……流通費用の節約という……利子の……機能を採用し上げるべきだと考えておられることは、この引用文によって明らかであるが、氏は何故そのように考えられるのであろうか。「利子の機能」を明らかにする場合には、出発点としてはまず利子とは何かということを明らかにし、しかる後に「利子の機能」を明らかにすべきであるということとは、「利子の機能」という文字面をみただけでも明らかなことではないであらうか。利子とは何かということを明らかにしないで、まず「利子の機能」である「流通費用」の節約を説き、しかる後に「流通費用」の節約ということを根拠にして利子を明らかにするなどということは、理論展開の方法としてとうてい許され得ないことであらう。ところが、こうした逆立ちした方法は、決して右の引用文でだけいわれているのではない。氏の『経済原論』（新版）においても利子論はまさにそのような方法で展開されているのである。

すなわち、そこではまず「資本の再生産過程は……多かれ少かれ遊休貨幣資本を常に伴うものである」（前掲 新版『経済原論』一九七頁）と述べられ、次いで、商業信用によって、さらに銀行信用によってその遊休貨幣資本が節約され、「商品の販売は促進せられ、流通資本は社会的に節約されることになる」（同上 一九九頁）、そして「流通資本の資本家社会的節約は、いうまでもなくその生産資本化として剰余価値の生産を増加する」（同上 二〇一頁）といわ

れた後に、はじめて利子が説かれているのである。つまり宇野氏は、信用は産業資本間での遊休貨幣資本の相互融通——商業信用は直接的な・銀行信用は銀行資本を媒介にしての・相互融通——であるとし、信用、いいかえれば、産業資本間での遊休貨幣資本の相互融通は、社会的にみれば流通資本Ⅱ「流通費用」の節約をもたらし、そしてその節約された流通資本は社会的にみれば生産資本の増加を、したがってまた、剰余価値の生産の増進をもたらすものであるとして、そのことから「流通費用」の節約をもって利子の根拠——社会的根拠——とされているのである。そして、こうした利子論の方法こそが、マルクスとは異り、貸付資本を「資本の再生産過程の外に在る貨幣資本家の資本」（前掲『資本の物神性について』二〇頁）としてでなく把握し、利子の根拠を貨幣資本家と機能資本家の個人的な関係からではなく明らかにするものだと考えておられるのであろう。

しかし、こうした方法の誤りは、現実の事態の進行をみてもわかる。産業資本家が遊休貨幣資本を相互に融通しあうならば、社会的にみて流通資本Ⅱ「流通費用」が節約され、剰余価値の生産が増進され、結局は産業資本家達の利益になるということは事実であるとしても、単にそのことだけでは遊休貨幣資本の相互融通は現実には生じはしない。遊休貨幣資本の相互融通による「流通費用」の節約、またはそれに基く剰余価値の生産の増進ということは、ただ個々の資本家の私的な利益を通してしか達せられないのである。そして「流通費用」の節約が「利子の機能」であるとするならば——といっても、「流通費用」の節約は「利子の機能」ではなく、信用の役割とすべきであると考えるが、一応、宇野氏にしたがって利子と「流通費用」の節約との関係を「利子の機能」として結びつけて考えてみると——産業資本家は手許の貨幣を貸付ければ、あるいは同じことであるが銀行に預金すれば利子が得られるために貸付け、あるいは預金し、銀行はやはり貸付をすれば利子が得られるために貸付をするということを通して、そしてそ

の結果として、「流通費用」が社会的に節約されるのである。つまり、「流通費用」の節約は利子が存在することの結果として、はじめて生ずることなのである。<sup>(5)</sup> 現実の事態がこのように進行するとすれば、「その出発点において……流通費用の節約という資本主義体制における利子の極めて重要な機能を採り上げ」ねばならないとする方法の誤りは明らかであり、また、「流通費用」の節約をもって利子の根拠とする氏の利子論の誤りも明らかである。

(5) ここでは、商業信用と利子との関係については述べなかったが、それは氏自身、旧版『経済原論』——この旧版と新版とは本質的に変わっているとは思えないが——で、商業信用においては利子は「なお一般的な根拠を与えられることにはならない」(前掲、旧版『経済原論』下巻 二四一頁)と述べておられるからである。なお、商業信用と利子との関係については、「商業信用は——引用者——資金の流用から資本力を増大し、一定量の資本による剰余価値の生産を増進することになるのであって、かかる融通に対してその代価として利子を支払い得ることになる」(同上、二四一頁)ともいわれているのでこの点について簡単にふれておくと、まず問題になるのは、氏の利子論では利子の範疇規定は何らなされことなく商業信用が論じられているということである。つまり、利子という範疇が明らかにされなければおそ「利子を支払い得る」かどうかということとは論じ得ないことであるにもかかわらず、利子という範疇は何ら明らかにされないままいきなり「利子を支払い得る」といわれているのである。また次に問題になるのは「利子を支払い得る」という規定の仕方である。一体、「利子を支払い得る」というのは「利子を支払い得る」けれども支払わないということであろうか、それとも、必ずしも利子を支払う必要はないのであるが「支払い得る」から支払うのであろうか。経済学で利子を問題にするとすれば、それは支払われるか、支払われないかということであり、また支払われるとすればそれは「支払い得る」から支払うのではなく「支払わねばならない」から支払うのである。「支払い得る」などといわれても事態は何らかにされない。

また氏は、「流通費用」の節約は「資本主義体制における……極めて重要な」事柄であり、そしてそれは利子が存在することによって、「利子の機能」として、はじめて生ずることからも、「流通費用」の節約を利子の根拠

(存在根拠、合理的根拠)とされたと考えられるが、利子は「流通費用」を節約するために意識的に作りだされたものではないのであるから、こうしたことから「流通費用」の節約を利子の根拠とすることは出来ない。つまり、資本主義社会は意識的・計画的に生産および分配が調整される社会ではないのであるから、「流通費用」の節約ということが資本主義体制にとっていかに重要なことであるにしても、また利子が存在することによって、「利子の機能」として、はじめて「流通費用」が社会的に節約されるにしても、そのことから利子の根拠を「流通費用」の節約とすることは出来ないし、ましてその根拠から利子を説くことは出来ないのである。<sup>(6)</sup>

(6) 利子の根拠としては、氏はなお附随的に利潤率の均等化をあげておられるが、この利潤率の均等化も、「流通費用」の節約と同じように、人々が利子を得るために貨幣を貸付けるというを通して、その社会的結果として生ずることなのであるから、かかる結果として生ずるものをもって逆に利子の根拠とすることは出来ない。また、利子は利潤率を均等化するためにつくられたものではないので、かかる意味においても、利潤率の均等化を利子の根拠とすることは出来ない。

## 二

利子の根拠についての氏の理論の以上のような誤りは、また、貸付けられる貨幣の規定においても、それと利子の関係においてもあらわれている。それらの点について氏は次のようにいわれている。

「銀行は、資金の貸付を媒介するにすぎない。しかもそれは資金自身を商品化して、いわゆる貨幣市場を形成し、そこで行う売買としてあらわれる。利子はいわば一定期間の資金の使用に対する代価にはかならない」(前掲 新版『経済原論』二〇一頁)。「貸手と借手との関係は……売買関係としてあらわれる貸借関係である。貸手は、貨幣を借手に譲渡して、一定期間の後に返還されるのであって、その点ではたしかに貸借関係であるが、しかしこの貨幣は一定



期間は自由に使用されうるものとしていわゆる資金をなし、その使用価値が一定の代価をもって借手に売却されるのである。それは『貨幣』を商品として売買するものといってよい。利子はその価値または価格をなすわけである。もちろんここでいう『商品』とか、『価値』『価格』とかいうのは本来の意味ではない。しかしこの貸借関係は、商品売買と同様に行われる。……ここで売買される商品としての貨幣は……一般に『資本としての使用価値』——『平均利潤を産む能力』——を有するものとしてではない。貸手にとっては、遊休貨幣資本としてあるのであって、自らはそれをさらに資本として使用するわけにはゆかない。したがってまた借手にとってもそれだけでは資本となすことはできない。自己の資本の運動を補助する貨幣として、資本力を増進することになるのである。次に、それは、商品として当然のことであるが、その使用価値が一般に何人にも、商品の買入れ、あるいは支払いに、自由に使用しえられる貨幣として商品とせられるのであって、買手としての借手の手において如何様に使用せられるかによって、例えば資本として特定の商品の買入れに充てられるか、あるいは単なる支払いに充てられるか、によってその使用価値を決定されるものではない」(前掲『経済学方法論』二七四—五頁)。

まず、ここでは、貸付けられる貨幣は商品と規定され、商品化するものは資金といわれ、あるいはカッコをつけて「貨幣」といわれているのであるが、その商品の使用価値は、「この貨幣は一定期間は自由に使用されうるものとしていわゆる資金をなし、その使用価値が一定の代価をもって借手に売却されるのである」「その使用価値が一般に何人にも、商品の買入れ、あるいは支払いに、自由に使用しえられる貨幣として商品とせられる」といわれているように貨幣としての使用価値にすぎないのであるから、結局のところ商品として取引されるものは単なる貨幣——資本としての規定における貨幣ではなく、貨幣としての規定における貨幣——ということになる。<sup>(?)</sup>したがって、その商品の

(8) 価値または価格とされる利子は、その商品自体からはいかにしても導きだすことが出来ない。つまり商品として取引される際にその商品がもっている使用価値に対して利子が支払われるという根拠は何もないのである。そこで利子はその商品自体ではなく、商品が取引された後に、社会的結果として生ずる「流通費用」の節約にその根拠を求めねばならなくなっているのである。しかし、利子の根拠を「流通費用」の節約に求めることが誤りであることは既に述べた通りである。

(7) このように、氏がいわれる商品の使用価値は貨幣の使用価値にすぎず、したがって商品として取引されるものは単なる貨幣——貨幣としての規定における貨幣——にすぎない。そこで、利子はその商品の価格であるとすれば、その商品の買手つまり借手は貨幣を貨幣で買うということにならざるを得ない。そしてこのことは、つとに、三宅義夫氏によって「貨幣で貨幣を買う、なんという徒勞であろうか」(三宅義夫「純利子生み資本小論——宇野弘藏氏の所説によせて——」『貨幣信用論研究』昭和三十一年 未来社刊 所収 三〇九頁) と批判されている。しかしながら、このことに対しては何ら反批判らしいものもなされておらず、また改められてもない。

(8) 宇野氏は「利子はその『商品の——引用者』価値あるいは価格をなすわけである」といわれるのであるが、ここで商品となるのは貨幣なのであり、貨幣はそれ自身、労働生産物として一定量の価値をもっているのである。そこで、貨幣がその価値以外に利子という価値をもつとしたならば、貨幣——すなわち、その商品——は二つの価値をもつことになってしまう。この点については「もちろんここである『商品』とか『価値』『価格』とかいうのは本来の意味ではない」といわれているが、「本来の意味ではない」ということで無原則的に商品、価値、価格という言葉を使われることはただ混乱を招くだけで事柄を明らかにするためには少しも役に立たない。特に、利子を商品の価値とすることは何ら積極的な意義をもつものではない。

なお、氏自身にこのように商品、価値、価格という言葉が無原則的に使われながら、マルクスが「普通の商品の購買者が買うのはその商品の使用価値であり、彼が支払うのは商品の価値である。貨幣の借手が買うのも貨幣の資本としての使用価値で

はあるが、しかし、彼は何を支払うか？ 他の商品の場合とは異なり、商品の価格または価値でないことは確かである。……手放される価値と回収される価値との同一性は、ここでは全く別の様式であられる。価値額たる貨幣が等価なしに手放され、一定期間後に返還される」（『資本論』Ⅲ三八六）と述べていることに對しては「マルクスの場合には、『貨幣の資本としての使用価値』を『買う』借手は、『その価格または価値』を『支払』わないというのである。勿論、その貨幣の『価値額』をそのまま支払うわけではないが、しかしこの『貨幣の資本としての使用価値』を『買う』借手も無償で『商品』を買うわけにはゆかない。……何故にこの場合の貸借關係に、資本を商品とする売買關係を想定しなければならないか、が問題であるといつてよい」（『前掲経済学方法論』二七二—二三頁）と批判されている。

しかし、マルクスはここでは、この商品の買手は商品自身もっている価値（貨幣の価値）またはその形態としての価格を支払うのではないということ、この商品は商品とはいっても普通の商品とは異った「独自の種類の商品」であるということ、しかしそれにもかかわらずなお、「手放される価値と回収される価値との同一性は、ここでは全く別の様式で」とはいえ「あらわれる」のであり、普通の商品との共通点をもっているということを述べているのであって、この個所だけをみても、マルクスは、宇野氏とは異り、貸付けられる貨幣を決して無原則的に商品と述べているのではないということがわかる。まして借手は無償で商品を買うなどということは、マルクスはどこにも述べていない。借手が支払うこの商品の価格については、「利子生み資本は……独自の種類の商品となり、したがって利子はその価格となる」（『資本論』Ⅳ四〇〇—一）と明記されているのである。

したがって氏の批判は全くためにする批判というよりはかはなく、また「何故にこの場合……資本を商品とする売買關係を想定しなければならないか」ということを理解することが利子生み資本を理解するために決定的に重要なことなのであるが、それはともかくとして、ここで批判されているマルクスの文章と氏自身の商品、価値、価格という言葉の使い方を比較しただけでも、氏の言葉の使い方、概念規定の仕方の粗雑さ、あいまいさが明瞭になる。

また、「ここで売買される商品としての貨幣は……借手にとって……自己の資本の運動を補助する貨幣として、資本力を増進することになる」といわれていることからみると、個々の資本家をとってみても、貨幣を借入れるとそれ

だけ自己資本の資本力が増進するということから、「資本力の増進」をもってその商品に対して利子が支払われる根拠とされているものと思えるが、そのように考えても、「資本力の増進」は、借手つまり買手がその商品を買入れた後に、借手のもつて、生ずることであつて、氏の理論にあってはその商品は取引される際には資本力を増進するという使用価値はもたないのであるから、その商品自体に対して価格 $\parallel$ 利子が支払われるのではなく、その商品が取引された後に生ずることを根拠にして、価格 $\parallel$ 利子が支払われることになる。しかしながら、そのようなものは、およそ商品として取引されるものとはいえないのである。したがつてまた、「資本力の増進」をもって、その商品に対して利子が支払われる根拠とすることは出来ない。

さらに、個々の場合をとつてみるならば、貨幣を借入れたとしても、それによつて必ず自己の資本の資本力が増進し、利潤が増加するとはかぎらず、逆に利潤が減少したり、損失が生じたりする場合もあるが、そうした場合にも利子の支払はなされなければならないのである。そこで、氏の理論にしたがえば、その商品は取引された結果として生ずる、あるいは生じないかも知れないのも根拠にして価格 $\parallel$ 利子が支払われるということになる。

氏は、自己資本の資本力が増進されない場合にも利子が支払われるという点については、「流通費用」の節約という社会的根拠をもつてその根拠とされるのであろうが、かかる社会的な根拠が明らかにされただけでは個々の貸付に対して利子が支払われるという根拠が明らかにはならないために、貸付けられた貨幣は「自己の資本の運動を補助する貨幣として、資本力を増進することになる」といわれているのである。したがつてこの場合、氏の論理にしたがつても、かかる社会的根拠をもつて利子が支払われる根拠とすることは出来ない。つまり、個々の場合をとつてみれば貨幣の借入によつて自己本資の資本力が増進されるとはかぎらないにもかかわらず利子が支払われるという点につい

ては「流通費用」の節約という社会的根拠をもって利子が支払われる根拠とされ、また、「流通費用」の節約という社会的根拠が明らかになっただけでは個々の貸付に対して利子が支払われる根拠が明らかにならないという点に対しては、借手はその貨幣の借入によって自己の資本の資本力が増進されるということをもって答えるという論法で利子の根拠を説き去ろうとされているのであるが、こうした論法自身が利子の根拠についての氏の理論の混乱と誤りを示しているのである。

なお、「商品として当然のことであるが、その使用価値が一般に何人にも、商品の買入れ、あるいは支払いに、自由に使用しえられる商品とせられる」ということも、貸付けられる貨幣を商品と規定される一つの論拠となっているのであるが、氏の理論にあつては、他方では貸付資本は「産業資本の循環中に必ず生ずる遊休貨幣資本が、銀行資本の媒介によって資金として他の産業資本に融通され、利用される関係において見られる」（前掲『経済学方法論』二六九頁）ものと規定されているのであり、したがって「その使用価値が一般に何人にも……自由に使用しえられる」どころか、買手は産業資本家でなければならず、またそれは「自己の資本の運動を補助する」ために使用せねばならないと厳格に規定されているのである。そして利子の根拠が「流通費用」の節約だということも、このように貨幣の借手およびその使用方法を外から規定することによって、はじめて導き出されたものである。そこで「その使用価値が一般に何人にも……自由に使用しえられる」といわれても、それは氏の理論の自己撞着を示すものでこそあれ、貸付資本として貸付けられる貨幣を商品と規定される論拠とはならない。

このように、氏の利子論にあつては、貸付資本として貸付けられる貨幣は商品といわれ、資金あるいは「貨幣」が商品化するといわれているのであるが、その商品の使用価値は貨幣の使用価値にすぎないものであり、したがって商

品化するものはその内容からみれば単なる貨幣——貨幣としての貨幣——にすぎないものである。しかし、貨幣は、単なる貨幣としては、商品とはなり得ないものである。また現に、氏はそれが商品であるということの論証に、いづれも失敗しておられる。特に、その商品に対して価格＝利子が支払われる根拠、その価格＝利子と引換に商品が譲渡される根拠は、その商品の使用価値に、その商品自体にあるのではなく、その商品が取引された後に生ずる「流通費用」の節約や「資本力の増進」にあるというまことに奇妙な商品ということになっている。また、「流通費用」の節約や「資本力の増進」を利子の根拠とすること自体も——氏はこの二つを巧みに使いわけてそれを説き去ろうとされるのであるが、もともと、商品が取引された後に生ずること、貨幣が貸付けられた後に生ずることをもって利子が支払われる根拠とすること自体が誤りである以上——また、誤りといわざるを得ない。そして、氏がこのような誤りをおかされたのは、貨幣が資本として機能するという使用価値をもつ商品として取引れるということ、つまり資本が商品として取引されるということを正しく理解されず、それを単に、借手が借入れた貨幣を現実に資本として機能させることだと理解されたことの当然の帰結といえる。いいかえれば、氏の利子論は、貨幣が資本として機能するという使用価値をもつ商品として取引されるということを正しく理解し、そのことに基いて貸付資本を理解して行かないかぎり、いかに努力を積み重ねても、貸付資本もその利子の根拠も全く理解され得なくなるということを示しているといえるであろう。

そしてまた、氏が、資本が商品として取引されるということを正しく理解されなかったのは、資本というものを  $G-W \wedge \overset{A}{P}m : P : W' | G'$  または  $G-W | G'$  として運動する価値の運動体としてのみ把握され、貸付資本にあっては、資本が貨幣として、物としてあらわれるという資本関係の物化、資本物神を理解されなかったためといえる。と

ころがそれにもかかわらず——あるいは氏の理論からいえば当然のこととして——氏は次にみるように、貸付資本においては資本の物神性は説けないといわれているのである。

## (2) 物神性についての宇野弘藏氏の見解

貸付資本と資本の物神性の関係については宇野氏は次のようにいわれている。

「貸付の利子は市場の情況で変るわけで、これを資本が本来生む利子とはいえない。……貸付資本のように市場で変動する利子をただちに資本の物神性としてしまうのは、貸付を受けた資金で、資本が追加的に価値増殖をなす機能を認めないことになり、利子の根拠が不明になってしまう。その利子はそう不思議な価値増殖力じゃないんだ。それじゃ物神性というのが底の浅いものになるのではないか。少くとも資本の物神性というのは、資本に固有の力としてあらわれるものと解すべきではないか。／……それ自身に増殖力をもったものが貨幣市場では変動するというのは、じつにおかしいいい方なんだ。それでは物神性は本当は説けないわけだ。このまえの岡田氏にしてもその点何かぼくが理解しないもののようにいつていたが、どちらが物神性を明らかにしていることになるのか。もちろんこの物神性というのは、マルクスの一つの面白い発見だとぼくも思う。だけどこれを商品で説いたために、どうもそれがピンとこない。すでに労働価値説でその根拠が暴露されているので物神性が実際はきかない。……ぼくはあの商品のところの物神性を読むたびにいつもそう思う。これがマルクスのいうようにどうしてそんなに不思議なのか、なにも不思議じゃないのじゃないか——と」<sup>(9)(10)</sup>（前掲『資本論研究』三三四—三五頁）

(9) この引用文は、直接には長幸男氏の批判（前掲「利子論にかんする研究——宇野『利子論』展開の仕方——」）に対する反利子生み資本と資本の物神性（上）

論として述べられているのであるが、それを通してマルクスを批判されているのである。なお、引用文中、「岡田氏」といわれているのは岡田裕之氏（「商業資本の可変資本の平均利潤への参与について（下）」『経済志林』第一巻第二号）のことである。

（10）ここでは、「市場で変動する利子を……資本の物神性にしてしまう」「利子はそう不思議な価値増殖力じゃないんだ」というようにして、利子を資本の物神性とするかどうかということを論じておられるが、資本の物神性は文字通り資本に関することであって、利子が資本の物神性であるはずはないのである。資本が利子を生むかどうか、または、利子を生むものが資本かどうかということが問題にされねばならないであろう。また、一方ではその「利子はそう不思議な価値増殖力じゃないんだ。それじゃ物神性というものが底の浅いものになる」といわれながら、他方では「それでは物神性に本当は説けない」といわれている。「物神性は……説けない」ということは、物神性がないから説けないのであるが、「物神性」というのが底が浅いものになる」ということは、底は浅いものであっても、物神性はあるということであり、説けるということである。したがって、そこに自己撞着がある。以上のことは、必ずしも、この引用文がセミナーという形式のために表現が不正確になったということではなく、むしろ、氏が物神性というものを正しく理解されていないということの一つの現れと見るべきであろう。

まず、貸付資本の増殖力をあらわす利子率が「貨幣市場」の情況によって、つまり貸付けられる貨幣——資本としての貨幣——に対する需要供給の変動によって変動するということは事実である。しかし何故、利子率が「貨幣市場」の情況によって変動するならば、その利子は「資本が本来生む利子とはいえない」のであろうか。何故、「それ自身に増殖力をもったものが貨幣市場では変動するというのは、じつにおかしい方」なのであろうか。また何故、「それでは物神性は本当は説けない」のであろうか。こうした疑問は当然に出て来るのであるが、それに対しては何ら答えらしい答えはなされていない。むしろ、「どちらが物神性を明らかにしていることになるか」といわれているように、それは当然のこととされているのである。しかしながら、利子率が「貨幣市場」の情況によっていかに



変動しようとも、貸付資本として貸付けられる貨幣が利子を生むということ、いいかえれば「それ自身に増殖力」をもつということに変わりはないのであって、むしろ、その貨幣に対する需要供給によって利子率<sup>(1)</sup>が変動するということは、その貨幣が利子を生むという力をもったものであること、「それ自身に増殖力をもったもの」であることを前提にしてはじめていえることなのである。また、その貨幣は、既に述べたように、単なる貨幣として取引されるのではなく、資本として機能するという使用価値をもつものとして、つまり資本として取引されるのであるから、その利子はまさに資本が生みだすものである。そしてこのように、資本が貨幣として、物としてあらわれ、物が利子を生むという属性をもつものとしてあらわれるということが資本の物神性なのである。したがって「じつにおかしい方」をされているのは宇野氏なのであり、「どちらが物神性を明らかにしていることになるか」という言葉も氏自身に向けられねばならないであろう。

(11) 宇野氏が「貸付の利子は市場の状況で変る」「貸付資本のように市場で変動する利子」(傍点はいずれも引用者)といわれる場合の利子は明らかに利子の大きさを意味するのであり、通常、利子率または利子歩合といわれている。そこでそれを利子率といいかえて論じて行くことにしたい。もっとも、後に明らかにするように、氏の利子論にあっては、利子と利子率とが明確に区別されていないのであって、そのことが氏の利子論を正確に理解する上での大きな妨げとなり、また氏の利子論の欠陥を隠蔽する役割をはたしているのである。

また、「貸付資本のように市場で変動する利子をただちに資本の物神性としてしまう」と「利子の根拠が不明になってしまう」というのも、「じつにおかしい方」である。物神性というのは客観的な事実をいうのであって、「物神性にしてしまう」とか、「してしまわない」とかというようなことは問題にすべきことではないのであり、ま

た 「利子の根拠」は、その「利子を……資本の物神性としてしまう」か否かにかかわりなく、われわれが研究によって明らかにすべきものなのであるから、その「利子を物神性としてしまう」ととたんに「不明になってしまう」ようなものではないのである。あるいはここでは、「利子の根拠」が明なかにされれば、「その利子を……資本の物神性」とはいえなくなるということはいわんとされているのかとも思えるが、そのように考えても、物神性というものは客観的な事実をいうのであり、それは「利子の根拠」が明らかにされるか否かというようなことは関係がない以上、氏がいわれることの誤りは明らかであろう。

このように、氏がいわれることはいずれも誤ったものであるといわざるを得ないが、それにもかかわらず、逆に「どちらが物神性を明らかにしているになるのか」と開きなおっておられるところを見ると、それは単に、貸付資本として貸付けられるものは資本ではなく資金であると解されたためだけではなく（といっても、そのこと自身、資本物神性についての無理解に基くものであるが）、「物神性というのは、マルクスの一つの面白い発見だ」とか、「根拠が暴露されているので物神性が実際はきかない」とか、「不思議」なものだとかいわれるような物神性についての氏の考え方によるものといえるであろう。また現に、氏を批判された長幸男氏や岡田裕之氏に対して「物神性についての考え方自身が問題なのじゃないかと思う」（同上 三三三頁）と反論されているのである。しかし、物神性というものは決して単にそのようなものとして片づけるわけにはいかない。問題はやはり、氏自身の「物神性についての考え方」の方にある。

商品生産社会、さらには資本制社会においては、人々は互に独立した人格をもつものとして存在し、物を通してはじめて社会的関係をとり結ぶため、社会的諸関係、生産諸関係は物に結びつき、物的形態として現象し、物が社会的

な屬性をもつものとして、いいかえれば、物が社会的な力をもつものとして現象するようになる。そしてこのように、社会的諸関係、生産諸関係が物的形態をとり、物が——生産当事者から自立して——社会的な屬性を、社会的な力をもつものとして現象するということが物神性なのである。ただこの場合、現象するというのは単に人間の眼にそのようなものとして映るということではなく、客観的に物が社会的な力をもつということをも意味するのである。したがって物神性という場合、人間がその物の社会的な力に、物に支配されるということを含むのである。もっとも、物がある社会的な力をもつということは特定の生産諸関係の下でだけ生ずることであるから、その基礎となる生産諸関係とは無関係に物がかかる力をもっと考えるのはたしかに物神性にとらわれた考えであるが、ひとが物神性の秘密を暴露したからといってそのことだけで物神性がなくなるわけではない。物神性にとらわれた考えは物神性の秘密を暴露することによって取除かれ得るとはいえ、その基盤となる生産諸関係が存在するかぎり、物が社会的な力をもち、人間がその力に支配されるということに変わりはないのである。

そしてそのことは貸付資本についてもいえる。貸付資本として貸付けられる貨幣が利子を生むということは、資本関係の存在と無関係に生ずるわけではないが、資本関係が存在するかぎり、そして貨幣資本家と機能資本家の対立が存在するかぎり、貨幣は利子を生むという屬性をもつものとして現象するのであり、また現に、貨幣は貸付けられることによって利子を生むのである。<sup>(12)</sup>そして利子の根拠が明らかにされるならば、貨幣が利子を生むというのは、貨幣——または貨幣商品となる金——の自然的屬性によるのではなく、資本関係が物的形態として現象したものであり、貨幣は資本関係を離れてはかかる屬性をもたないということとは理解されるとはいえ、そのことによって、貨幣が利子を生む力をもつという事実はなくならないし、また人間がかかる物の力による支配から、つまり物による支配

からのがれることも出来ないのである。

(12) 資本関係の存在を前提にした場合、貨幣——より一般的には、貨幣または商品——が何故、利子を生むという属性をもつかということは、『資本論』の最初から第三部第五篇までの理論展開を通して明らかにされていることであるが、『資本論』の中からそのことが簡単に述べられている箇所を一箇所引用してみると次の通りである。

「貨幣または商品が即目的・潜勢的に資本であるのは、労働力が潜勢的に資本であるのと全く同じである。ただし（一）、貨幣は生産諸要素に転形されうるのであって、実は生産諸要素の単に抽象的な表現、生産諸要素の価値としての定在だからであり、（二）、富の質料的諸要素は、資本制の生産の基礎上ではそれらに對しそれらを補足する対立物すなわちそれらを資本たらしめるもの——賃労働——が現存するが故に潜勢的にはすでに資本たるべき属性を有するからである。／質料的富の対立的な社会的規定性——質料的富の賃労働としての労働との対立は、生産過程から分離しても、すでに資本所有としての資本所有において表現されている。ところでこの一契機は——これは、資本制の生産過程の恒常的成果であり、また、該過程の即自恒常的成果として該過程の恒常的前提なのであるが、この資本制の生産過程そのものから分離しても——貨幣ならびに商品が的・潜在的・潜勢的に資本であること、それらは資本として売られうること、および、それらはこの形態では他人の労働に對する指揮権であり、他人の労働を取得する要求権を与えるものであり、したがって自らを増殖する価値であること、こうしたことにおいて自らを表現する」（『資本論』Ⅲ三八九、傍点—引用者）。そして貨幣は「資本として売られ得る」——利子はその価格となる——ということによって、利子を生むという属性を受けとるのである。

かくして、生産手段の所有者と生産手段の非所有者たる賃銀労働者の対立・前者による後者の搾取・の関係は、 $G-G'$ という形態をとってあらわれ、貨幣は利子を生むという属性をもつものとしてあらわれるのである。

したがって、物神性というものを単に「不思議」なものとしてのみ理解するならば、その「不思議」さはわれわれの研究によって取り除かれるもの、根拠が明らかにされれば「不思議」でなくなるものとして理解され、物神性は人間の眼にいかにか反映するかという側面からのみ理解され、その根拠が明らかにされると否にかかわりなく、物が社会的

な力をもつという側面が理解されなくなるのであろう。また、たとえ物神性を「不思議」なものとして理解するにしても、その「不思議」さは、この場合でいえば、貨幣が利子を生むということにあるのであって、利子率が「貨幣市場」の状況で変るから「不思議」ではないとか、物神性が説けないとかということは出来ないのである。

いままでみて来たように、宇野氏は「物神性というのは、マルクスの一つの面白い発見だ」とか、「根拠が暴露され」と「物神性」が実際はきかない」とか、「不思議」なものだとかというような物神性についての考え方に基いて、「貸付の利子は市場の状況で変る」ということ、あるいは、その「利子をただちに資本の物神性としてしまう」と「利子の根拠が不明になってしまう」ということから、貸付資本においては物神性は説けないといわれるのであるが、それらはいずれも誤りといわざるを得ない。そして、こうした資本の物神性についての氏の理解の誤りは、単にそのことだけにはとどまらず、利子論の他の誤りと結びつき、利子論全体を——さらには経済理論全体をも——誤ったものに導かざるを得ないのである。いま、そのことを利子の根拠との関係において簡単にみてみたいと思う。

貨幣が資本として機能するという使用価値をもつ商品として取引されるということ、つまり資本が商品として取引されるということの意味を氏が正しく理解されなかったのは、資本関係の物化、資本物神についての無理解に基くものであり、またそのために利子の根拠も明らかにされ得なくなっているということについては既に述べたのでここで繰り返すまでもないが、資本の物神性についての氏の無理解、あるいは誤った理解は、また「流通費用」をもって利子の根拠とされるという点にもあらわれている。

既に述べたことであるが、「流通費用」の節約は貨幣を貸付ければ——または同じことであるが、銀行に預金すれば——利子が得られるがために、人々は手許にある貨幣を出来るかぎり貸付ける——または預金する——ということ

を通して、その結果としてはじめて生ずることである。<sup>(13)</sup>つまり、貨幣が利子を生むという属性に基いて、利子を生むという貨幣の力に支配されて、はじめて人々は貨幣を貸付けたり、銀行に預金したりするのであり、その結果として流通費用が節約されるのである。したがって、「流通費用」の節約は利子を生むという貨幣の属性に基いて、いいかえれば資本の物神性に基いて明らかにされねばならないのである。ところが、物神性というものを単に「不思議」なもの、その根拠が暴露されれば「物神性を実際はきかない」ことになるようなものと考えられ、貸付資本においては物神性は説けないされる氏にあっては、当然のことながら、利子を生むという貨幣の属性に基いて「流通費用」の節約を解明されるどころか、逆に「流通費用」の節約に基いて利子を明らかにされ、利子の根拠とされているのである。

(13) 銀行への預金は、現実には必ずしも利子を得るためにだけなされるのではなく、日常の貨幣の出納、保管等の事務を銀行に代行してもらうためにもなされる。ただ、ここでは「流通費用」の節約を利子との関係においてのみ考察した。なおいい添えると、宇野氏の利子論（信用論を含む？）では、日常の貨幣の出納、保管等の事務を代行してもらうために預金されるということはほとんど顧慮されていないのであり、それは氏の理論の欠陥をなすものである。

また、氏にあっては、「流通費用」の節約は「資本主義体制における……極めて重要な」事柄であり、そしてそれは利子が存在することによって、「利子の機能」としてはじめてはたされるということからも、「流通費用」の節約を利子の根拠（存在根拠、合理的根拠）と考えられているということは既に述べたが、このようにして、利子が存在することによってはたされる社会的役割に——または「利子の機能」に——利子の根拠（存在根拠、合理的根拠）<sup>(14)</sup>を求めるならば、経済学の分析はその根拠が求められたところで、資本主義を合理的なものとして描き出すところで終ってしまうのであり、資本主義の発展の法則は見出され得ないものになってしまう。このように、あるものが存在

する結果としてはたされる社会的役割に——またはその「機能」に——その存在の根拠を求め、その根拠によってそれを説いて行くという逆立ちした方法は決して利子論だけではなく、むしろ氏の「原理論」を貫く方法であると考えられるが、そのことと氏の「原理論」においては資本主義の発展が説かれていない、あるいは説かれ得ないものになっているということは決して無関係ではないであろう。そしてそれはまた、氏が物神性を正しく理解されなかったことも無関係とはいえないであろう。もしも、利子と「流通費用」の節約とを結びつけて説きたいのであれば、既に述べたように、貨幣が利子を生むとい属性に基いて、つまり、かかる資本の物神性に基いて「流通費用」の節約を説かねばならないのであり、そうした場合、「利子の機能」——正しくは信用の割役というべきである——は、単に「流通費用」を社会的に節約するということにとどまらず、それを通して、再生産の規模を拡大し、資本主義を進展させるものとして、しかもその資本主義の発展を、物の力によるものとして、人間の意思とは無関係に必然的に押し進めるものとして、位置づけられ理解されることになるのである。そしてそれがまた、資本主義の発展の現実の姿でもある。

(14) こうした考えは、いいかえれば、もし利子が存在しなければ、「流通費用」は社会的にみて節約されないので資本主義体制にとっては不都合であるが、利子が存在すると「利子の機能」によってそれは節約されるために、資本主義体制にとって都合がよい、それ故に利子は存在するということであり、通俗的な、目的論的解釈である。そしてかかる目的論的解釈をもってしては、資本主義は合理的なものとして理解され得るにとどまるのであって、資本主義の矛盾も、その発展も見出し得なくなるのは、また当然といえる。